

## 人物

みのかも

⑤

柴田長七

## 伊深天王用水トンネルを掘削

伊深天王用水は、伊深町天王で川浦川より水を取り、灌漑面積約六五ヘクタールに及ぶ用水であるが、この用水の取り入れ口のトンネル工事は、明治二二年、同村の柴田長七が独力で施工したものである。

長七は、天保一一年（一八四〇）九月二六日、柴田八右衛門の二男として伊深村中切に生まれ、のち同村関也の柴田鉄太郎の養子となった。彼は体こそ小さかったが、生まれつき敏感で人の倍ほど目先がきき、よく動いた。少々あわてものであったが、人のためになると思ったことはどしどし実行した。

明治のはじめ、川浦川からの伊深村用水は、伊深村牛牧の川浦川

の彎曲部の断崖が突き出た所から三〇メートル程下流に堰堤があつて、そこに土俵を積んで水をせき止め、用水路に水を引き入れていた。しかし、堰の位置が取水口よりずつと下流にあるため、取水が困難であつた。しかも、この位置は、江戸時代に伊深・羽生両村の間で取り決められた協定により変更はできず、又、積み上げる土俵は八八俵以下と定められていたため、十分な水量は得られなかつた。したがって伊深村の用水は絶えず不足し、末端まで行きとどかなかつたにもかかわらず、何らその対策をほどこすこともできなかつたのである。

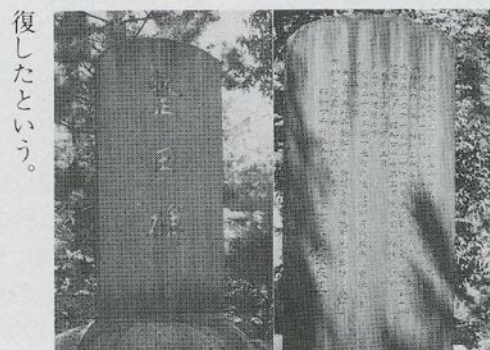
長七は、考えぬいた末、この協

力を求めた。しかし当時の村民は、夢のような話と一笑に付して賛同するものはなかつた。

略歴→天保11年(1840)9月26日伊深村に生まれる。明治22年2月より、天王用水トンネルを掘削。明治41年(1908)6月5日没。

そこで長七は、上古井村で新しい農業経営に取り組んでいる大畑市太郎にトンネル用水の測量と設計を依頼し、実現可能と見通しをつけた上で、決意して独力で着工した。村民の大部分は依然として反対を示し、村や有力者からの経済的援助は一切なく工事の財源は私財だけであつた。しかし、用水の末端地区の人々からは、一刻も早く水を引いてほしいという強い要望が高まっていた。明治一四年以来、一六・一八・二〇年と連続して干害に悩まされていたのである。当時、伊深村では石灰岩掘りが行われていたので、長七はその職人を雇い入れて作業を開始した。金ノミと金槌を使い岩石を少しづつ打ち割っていくという全くの手作業であつた。明治二二年二月のことである。

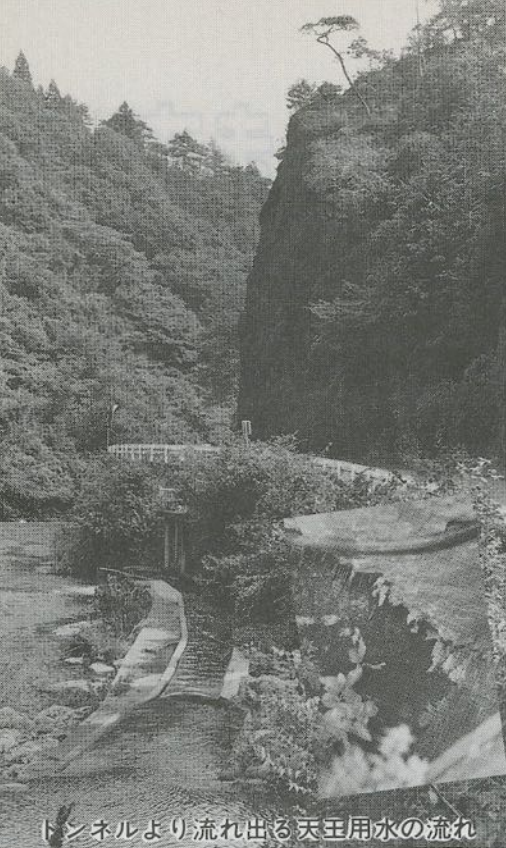
彼は、摩滅した金ノミの先を修理するため、それを袋に入れてかつき、毎日のように名古屋まで往



正眼寺参道に立つ整田碑

復したという。工事は予想以上の難工事となり、又資金も枯渇して途中でしばらく工事中断の事態にもなったが、苦勞の末、約六ヶ月かかって貫通した。上流と下流から掘り進んだトンネルは中央で少し食い違ひがあつたが、ほぼ一致したという。このような大工事で、しかも当時の技術を考えると驚くべきことである。このトンネルの開通により伊深村西南部の水田は絶えず潤うこととなったのである。後年、桜井福太郎村長時代に工事費の補助という名目で、村費四七円を長七におくり、感謝の意を表したと伝えられている。

この長七の功績は、土地改良の推進者であつた木沢権一氏及び灌漑用水を提供した村井鶴松氏の功勞とあわせて、正眼寺参道に立つ「整田碑」に刻まれている。



トンネルより流れ出る天王用水の流れ